

## VI. まとめ

### 1. 今年度の成果

今年度は「自己実現のためのより良い支援の在り方を探る」という目的で学校研究を行ってきた。

#### ①各学部の実践研究としての成果

望みの実現に向けて子どものプラス面を活用する中で知識の積み重ねや課題解決や活動性や参加の水準を上げるという試みでは各事例ともに成果が見られた。各事例で見られた教師の具体的な個々の支援策はその事例での必要から生まれたものである。同じ支援策をそのまま他の児童生徒に適用できるかどうかはその都度検討しなければならないが他の児童生徒への支援策を考えるうえでの参考になると思われる。

#### ②学校全体の研究としての成果

今回の学校研究において私たちには4つの「学び」があった。

##### **学び①子どもの見方**

私たちは、子どものできないところに目がいきがちである。子どもができているところに注目することと、子どもの全体像を捉えることの大切さを再認識した。

##### **学び②目標設定の視点**

これまでは「子どもの課題を目標にする」という視点からの目標設定を行なうことが多かったように思える。

今回の学校研究では「子どもの望みを目標にする」という視点から目標設定を行った。

##### **学び③指導や支援の姿勢**

今回の指導や支援の姿勢は、子どもの望みに着目して望みの実現に向けて得意なこと（プラス面）をより発揮できる活動を組み立ててその子の活動性を上げていくというものであった。この指導や支援に手ごたえを感じた。

##### **学び④子供の成長の要因についての考察の視点**

子どもの活動性や参加の水準が向上した時にその要因として教師の支援策については考察をしていたが、個人の内面の変化・成長についての考察することをこれまで見落としがちであった。私たちは今改めてその重要性に気づかされた。

以上の「学び」は私たちにとって今回の学校研究の収穫であった。

上述の4つの「学び」を踏まえて私たちは「目標達成のための構造図」の書式作成を行った。この書式を使うことにより子どもの実態把握や評価の方法に全校の統一性が図られた。

また、「目標達成のための構造図」の作成により子どもが主体性を発揮しつつ努力して自己実現に向かうための個別の指導計画と日々の授業とのつながりを整理することができた。

## 2. ICF の導入における成果と課題

今年度 ICF を全校的に取り入れて子どもの指導や支援に活用してきた。ここでは今年度 ICF を導入してみた成果と課題を総括する。

### 【成果】

- ・ ICF は「子どもがよりよく生きていくために教師はどういう支援をしたらよいか」についてのヒントを特別支援教育の中に改めて示唆してくれたのではないか。このヒントを職員が再認識できたのではないか。
- ・ 生活機能モデルの適用により、従来はともすればその中の「活動」だけに注目して子どもの実態を論じがちであったものを、実態把握のための複数の視点をもつことができた。
- ・ 生活機能モデルは「生きることの全体像を捉える」という視点から心身機能、活動、参加、環境因子、個人因子の視点から人が生きることを眺めている。そのため、教師の視点の偏りを防ぐと共に実践の方向性を整理する役割を果たして、より効果的な実践に結びつけることができた。
- ・ 子どもの成長の要因について考察をする時に、個人の内面の変化、成長について考察をするという視点を学ぶことができた。

### 【課題】

- ・ 中分類チェックリストの使い方や生活機能モデルの書き方について引き続き研修して理解に努める。

## 3. 次年度への課題

今年度の学校研究を振り返る中で見えてきた課題を以下に述べたい。

「個別の指導計画と日々の授業とのつながり」のあり方については一つの答えを出すことができたが、それらと「個別の教育支援計画」とのつながりについては整理できなかった。次年度の課題となった。

また、大目標の設定に至る過程については文章での表記を行ったが今後は目標達成のための構造図につなげる形での図式化について検討していきたい。

今年度は5事例について目標達成のための構造図を作成した。児童生徒一人一人について目標達成のための構造図を作成した際に、集団学習による授業の中で各自の目標を踏まえた学習活動の展開のあり方について実践しながら検討する必要があると考える。

子どものニーズの分析と把握について、今後、実践の積み重ねを通して私たちの力量を高めていきたい。